

認知症介護現場における情報機器に対する不安とその受容 Caregivers' Apprehension about ICT Devices in Group Home and Their Acceptance of It

杉原太郎*¹ 藤波努*¹ 山崎竜二*¹ 高塚亮三*¹
Taro Sugihara Tsutomu Fujinami Ryuji Yamazaki Ryozyo Takatsuka

*¹ 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科
School of Knowledge Science, Japan Advanced Science and Technology

We discuss caregivers' apprehension about ICT device and their acceptance for the apprehensive through a case study in three group homes which camera system installed. Despite this system leads to help caregivers and improve the quality of life for elderly people with dementia, there did not pay attention the problem. We studied how their behaviors have changed by introducing the system into the home through a series of interviews for six teen caregivers. We found that they appreciated merits of the camera system, but then they were afraid of being tracked by the system, especially initial phase of operation. We also figured out that they overcame the apprehension when system benefits their caregiving and they built their confidence for caregiving.

1. はじめに

急激に高齢化(2008年10月の確定値[総務省 2009]で、65歳以上が人口に占める割合は22.1%)が進展し、社会が経験してこなかった様々な課題に直面することが懸念されている。その課題の一つとして、認知症高齢者の増加があり、認知症高齢者自身のための、あるいはそれを支える介護者のための支援システムの開発および社会的な支援のあり方についての議論が必要である。多様化する社会の中で、個人が孤独化へと追いやられてしまわないよう、ヒューマンインタフェース技術を活かそうと試みる研究もある[片井 2005]が、このような試行を様々な観点から検討・実施・改善していくことが求められよう。

認知症者のための支援システムには、認知症者の記憶を刺激する回想法を支援するためのものや[Kuwahara 2006]、コミュニケーションを支援するもの[Alm 2007]、日常の行動パターンに沿って情報提示することで認知症者自身の自立を促すもの[成田 2008]がある。その一方で、自立のために重要な見守り介護を支援するための研究は少ない。著者らのグループでは、グループホーム(GH)を対象に、カメラシステム[中川 2008, 杉原 2009, Sugihara 2009]およびRFIDを利用したマットシステム[Miura 2009]を開発し、現場に導入し、その効果を調査してきた。

著者らの研究を進める間に、認知症介護の現場が抱える課題を解消するためには、単純にシステムを導入すれば良いのではなく、社会的課題も同時に検討する必要性が見えてきた。プライバシーについての課題と認知症者が見守られる権利については、すでに報告している[山崎 2008]が、まだまだ他に課題が山積している。

本稿では、その課題の一つである情報技術の受容について述べる。ケースは、3軒のGHであり、それに対する導入実践とその前後に実施した16名の介護者に対するインタビュー結果から考察を行う。

なお、本研究を推進するに当たっては、北陸先端科学技術大学院大学に設置された倫理委員会に諮っており、審査の結果認可されている(認可番号 20-006)。カメラ導入については、入居者の家族から同意を得ており、また、調査については介護

者からインフォームドコンセントを得ている。

2. 認知症介護におけるカメラシステムの位置づけ

2.1 認知症高齢者が直面する問題とその支援

認知症高齢者の多くが記憶力に問題を抱え、目前にいる人間が何者なのか理解できない。毎日世話してもらっている介護者のことさえ覚えられず、毎日「初めまして」という挨拶から一日を始めなければならない方もいる。そのような方にとっては出会う人すべてが初対面であり、周りは知らない人ばかりということになる。不安になる。

類推能力や記憶力が衰えていくと、なぜ自分がここにいるのかわからないことになる。いくつかの事象を結びつけて原因や理由を考える推論能力が損なわれるため現状を理解できず、「わたし、どうしたらいい?」「今晚、どこで寝ればいい?」といった発言となる。相手の発言の意味がわからないとか、発言の意図を誤解するといった問題もおきる。誤解が積み重なると、人間関係に軋轢が起きるのでこれも問題である。

健常者であれば、行動系列の連なりで日常生活が構成されるが、認知症高齢者は行動系列の間や、系列間で非連続な行動が挿入されることになる。この理解が介護における難しさの主要因である。この種の代表的な行動に弄便や徘徊がある。高齢者の精神世界では連続性も意味もある行動であっても、介護者に理解の難しいものは多い。

さらに、介護者は少ない人数で多数のお年寄りを介護しなくてはならないため、必然的に死角が発生し、見守りができなくなることがある。これが、非連続性をさらに高めることとなる。同じ人を見続けていれば行動の連続性を理解できる可能性はあるが、他人数への介護行動と家事・記録を並行しなければならない現場にあってそれは困難である。

お年寄り一人ひとりはその精神世界の中で整合性をもった理屈を持っており、それに基づいて行動すると考えられるが、介護者が気づくのは往々にして行動が始まった後、場合によっては行動が完了した後であり、その段階で目にしたことは突飛もないものとして映るのである。

2.2 カメラシステムがもたらすメリットおよび不安

著者らは、この非連続性を低減させるべく、事前調査に基づいて介護者の死角を解消するカメラシステムを導入してきた。

インタビュー結果より、録画がある場合、転倒時に頭を打っていないかを確認できたり、外出時の服装を確認できたりするメリットがあると感じていることが分かった。録画がない場合でも、死角から出てくるお年寄りに気づくことができるようになり、予備行動が容易に取れるようになったり、介護の必要性に応じた介護が提供できるようになったりしたと報告された。

その一方で、カメラを導入する際には漠たる不安を抱えていたとも報告されていた。その最大の原因は、プライバシー(介護者同士、入居者)侵害に対する不安であった。また、「見られることが嫌や」という内省報告に代表されるとおり、そこにカメラがあるということ自体が圧迫感につながっていた。

これは、いつかミスをする可能性があり、それを録画されることに対する不安であると考えられる。非連続的な行動が発生する現場を少人数で支えるのであるから、ミスが起きる可能性は否定できない。もちろん、リソースの限界からくるやむを得ないことであるが、失敗する姿を撮られるのはうれしいことではない。

3. カメラシステムへの抵抗感とその受容

以上の結果およびこれまでの一連の調査を通じて、また、本研究に対する GH 協会からの申し立て[朝日新聞 2008]を通して、現場に内在する以下の 5 種類の抵抗感が見えてきた。

- A) 情報機器に不慣れなことからくる抵抗感
- B) プライバシー侵害への警戒感
- C) いつか起きるかも知れないミスを記録されることに対する抵抗感
- D) 人と人の触れあいの場に機械を介在させてよいのだろうかという逡巡の気持ち・介護に機械が介在すると「冷たい」介護になるのではないかと恐れる
- E) 機器の導入が介護者を墮落させるのではないかと恐れる

これらは、技術者や工学系研究者にしてみれば、単なる情緒的なものとして映るかもしれない。しかしながら、現場のニーズに応えるためには、これらを解決しなければ前進しない。技術が現場で受け入れられるためには、利用の仕方について何らかの合意が形成されなければならないのである。

インタビュー結果からは、B)および C)の抵抗感に対しては、受容できたと報告する介護者が数人いた。その介護者たちのコメントをまとめると、

- I. メリットが大きいと感じられた場合
 - II. 介護に自信を持って臨むことができた場合
- が克服の原因であった。

メリットについては、前節で述べたものに加え、夜間介護の精神的負担が低減されたこともあった。メリットが大きければ、多少の不安は気にならなくなるようであった。

II. については、「悪いことはないのだから堂々としていれば良い」や「こっちが正しく使えば良い」というのが典型的な回答である。自らの態度や介護スキルに自信を持っている介護者は、システムを道具として認識していると考えられる。C)の問題を技術的な方策のみで解決することは困難であるため、システム開発と並行して適切なサービス形態を考えなくてはならない。

また、介護行動が自律的に行えるようになったことも、受容の原因のひとつであると考えられるが、紙幅の都合で割愛する。これについては、過去の報告[杉原 2009]を参照されたい。

4. おわりに

本稿では、3 軒の GH に対するカメラシステム導入実践およびそれに対する聞き取り調査から、カメラシステムが現場にもたらした不安とその受容について述べた。しかし、今回の調査は

データ数が少ないため、追加のインタビューや観察を行い、結果の妥当性を追求していかなくてはならない。さらに、今後はより多くの GH にシステムを導入し、効果測定を行う必要がある。加えて、他の情報機器についての調査も必要となる。これらを継続的に調査することで、この問題についての知見を深め、情報システムの開発につなげていく所存である。

謝辞

調査の機会をお与えいただいたグループホーム経営者の方々および、お仕事での貴重な時間を割いてインタビューにお答えくださった介護職員の皆様に深く感謝いたします。本研究は一部、文部科学省・知的クラスター創成事業「石川ハイテク・センシング・クラスター」の支援を受けて行われました。

参考文献

- [総務省 2009] 人口推計月報:総務省統計局, <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/tsuki/index.htm> (accessed on 2009-4-20)
- [片井 2005] 片井修:人と人を紡ぐメディアの在り方を探る—モノの豊かさからコトの深まりへ—, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.7, No.4, pp.513-527, 2005.
- [Kuwahara 2006] Kuwahara, N. Kuwabara, K., and Abe, S.: “Networked Reminiscence Content Authoring and Delivery for Elderly People with Dementia”, Proceedings of International Workshop on Cognitive Prostheses and Assisted Communication, pp.20-25, 2006.
- [Alm 2007] Alm, N., Dye, R., Gowans, G., Campbell, J., Astell, A. and Ellis, M.: A Communication Support System for Older People with Dementia, Computer, vol. 40, no. 5, pp. 35-41, 2007.
- [成田 2008] 成田拓也, 石渡利奈, 井上剛伸, 鎌田実, 小竹元基, 矢尾板仁, 認知症者を対象としたスケジュール把握支援システムの開発, 第 22 回人工知能学会全国大会 論文集, 2008
- [中川 2008] 中川健一, 杉原太郎, 小柴等, 高塚亮三, 加藤直孝, 國藤進: 実社会指向アプローチによる認知症高齢者のための協調型介護支援システムの研究開発, 情報処理学会論文誌, Vol.49, No.1, pp.2-10, 2008.
- [杉原 2009] 杉原太郎, 劉曦, 藤波努: カメラとモニタ導入に伴うグループホーム介護者の負担感に関する研究(第 2 報), 電子情報通信学会技術研究報告書, WIT2008-81, pp. 73-78, 2009.
- [Sugihara 2009] Sugihara, T., Nakagawa, K., Liu, X. and Fujinami, T.: The Effects of Camera System on Caregivers' Behaviors to Persons with Dementia, The HCI International 2009 Conference Proceedings, San Diego, CA, (to appear), July 2009.
- [Miura 2009] Miura, M., Ito, S., Takatsuka, R., Sugihara, T. and Kunifuji, S.: An Empirical Study of an RFID Mat Sensor System in a Group Home, Journal of Networks, Volume 4, Issue 2, pp. 133-139, 2009.
- [山崎 2008] 山崎竜二, 藤波努, カメラが提起する高齢者の自由とプライバシーの問題, 平成 19 年度京都市高齢者介護等調査研究事業報告書, pp.20-31, 2008.
- [朝日新聞 2008] [15]認知症グループホームに「見守り」カメラ 製品化中止, <http://www.asahi.com/health/news/TKY200809200081.html> (accessed on 2009-2-19).